大学出版

'98 夏

No.38

大学と社会を結ぶ
知のネットワーク

The Association of
Japanese University Presses
大学出版部協会

大学出版
38号

Summer·1998

読書の周辺　文字と経済学――――――――――――――――星川　順一　1

読書の周辺　古典の運命―ギリシア文学はどれだけ残ったか――中務　哲郎　6

大学出版部協会創立三十五周年を迎えて――――――――山下　正　11
―大学出版部いま転換の時期

歩く・見る・聞く―知のネットワーク　11――――――――14

大学出版部ニュース（付　ウェッブ上の大学出版部）――――16

新刊案内'98・4～'98・6――――――――――――――29

表紙イラスト　ヨースト・アマン『職人図鑑』より
大学出版部協会マーク・デザイン　道吉　剛
〈書籍の価格は本体価格で表示〉

■読書の周辺

文字と経済学

星川　順一

一

経済学は、仮定をおき、推論し、結論をうるという「科学」としての作業を行っている。結論が気に入らなければ、仮定の変更によって結論の変更もありうる。必ずしもそうなるとは限らないが。仮定の置き方にそれぞれの研究者の考え方が影響するが、推論は主観を含まない作業である。

私たちのこのような作業は、論理性についてではないが、比喩的に言えば、俳句と似ている。俳句は、一七文字の字数のうちに、自然や人間の思いを凝縮させる。「朝顔に釣瓶とられてもらい水」（千代女）、「古池や蛙飛びこむ水の音」（芭蕉）等々。それらを読む人は、それぞれの体験、感覚と知性において、その一七文字から自らの自然と風景や人々の感情を想起させる。人それぞれに、短い文章で壮大な想いを呼び起こすという作業は、俳句の特技であろう。世界には、これに類する文字の領域はあるであろう。

筆者は年齢を重ね残りの時間が短くなったゆえとは言い切れないように思われるが、著書や論集は短くて想像を掻き立ててくれるものが有り難い。より正確に述べれば、想像させる世界に比して短い文章が望ましい。その意味では、それが呼び起こす想像の世界との比較において、文章は長くても良い。

経済学で証明のために数学がよく用いられる。それは数学的証明の助力をうることでもあるが、それは同時に論文を短くし壮大な結論を早く述べることを可能とする。折角の機会であるので、自らの関心のある経済政策のことについて述べたいと思う。法人税率は国際的基準にするのは当然のことであるが、さらに所得税削減や公共投資などの提案がなされている。経済学者には周知のものであるが、それらを例題として非専門の方々を念頭に述べたい。

二

バブルの発生と崩壊以降、今日の日本経済は苦境のなかにある。このとき様々な政策が提案される。ここで経済学には幾つか良く知られた命題がある。国債の発行をともな

う所得税減税が議論の対象であるとしよう。もし家計が今日の受益と国債償還の将来の負担を正確に計算できるとしよう。また家計は財政を自らのもの（納税と受益）であるという意識をもつとしよう。このような仮定を置くならば、先の政策は貯蓄の増加を導き、有効需要の増加をもたらさない。貯蓄の増加をもって、将来の負担に備える。それは、リカードウの中立命題と呼ばれるものである。これについては、Barro: *Macroeconomics*（谷内満訳、多賀出版）が良く説明している。

自らの生命が国債償還期より短い人々にとっては、子孫が可愛いという想いがあれば、その貯蓄は遺産として残される（Barro: "Are Government Bonds Net Wealth?" *Journal of Political Economy*, Vol.82, No.6, 1974 を参照）。それは、子孫の将来負担のための遺産である。それは、私たちの現実を想起させるモデルであろう。

現実は、モデルの仮定を、どの程度満たすであろうか。それは、つぎの課題である。この仮説が崩れるモデルについては、柴田章久「公債の中立命題：展望」（『大阪大学経済学』第四十巻三・四号、一九九一年）が克明に報告している。その詳細な文献照査には、勉強になった。この中立命題が崩れるときには、困った事態が訪れる。

また、教育減税は、子孫への人的遺産を残す程度（教育効果の増進）に応じて、上記とは相違することになるであろう。税率体系変更については、別の議論が必要である。

三

つぎに、公共投資については、なお考慮すべきことがあるようである。貿易理論に、Heckscher-Ohlin 命題という有名なモデルがある。二国間の貿易において、両国とも生産技術は同じであり、また消費者の選好体系も同じであるとしよう。二国間で相違するのは、資源賦存量のみである。ほとんど全てが同じで、ただ一点のみが相違することによって貿易が成立するというモデルは、確かに天才的な発想であろう。それぞれが保有する資源を用いて生産し、それを輸出すれば、自国と世界の経済の最適点が導かれる（Krugman and Obsfeld:『国際経済』〈石井・浦田・竹中・千田・松井訳、新世社〉を参照）。石油や石炭をもつ経済は、それらを生産し輸出することによって、自国と世界の厚生を増加させる。

さて、このようなモデルがあるとき、日本経済にはどのような資源があるのだろうか。日本経済が唯一保有する資源は、人的資源である。個々の人的資本の能力、それらを活用する組織のみが、日本経済の保有する資源である。人的資本については、ノーベル経済学賞（一九九一年）を受けたベッカーの『人的資本』（佐野陽子訳、東洋経済新報社）が記憶に新しい。

このような条件のもとで経済政策を打とうとすれば、日本経済に関して、政策の方向はどこに向ければ良いかを考

えなければならない。しかも公共投資は、次世代の物的・人的遺産を形造る。

ここで日本経済にある条件を、もうひとつ挿入しておかなければならない。日本経済の民間部門（家計と企業）は、現在においても超過貯蓄である。政府はなにを為すべきか、読者のご判断をまちたい。先端産業発展への人的資本の育成、未来の日本経済の資源のために。政治には、壮大な構想と決断が要求される。

もっとも公共財に関し、無駄な投資（「公共財の限界効用＜私的財の限界効用」）を避けたいというのは経済学の念願であり、また政治的には行財政改革となる。これには、建設期間の長さ（未来に関する予測の困難）と、都市と地方の扶助体系との問題が発生し一定の困難を伴う。

さて、上記のごとく、貿易理論の文献を読むとき、現実の私たちの世界を念頭にすることが望ましい。

またリスクは何についても存在するが、直接投資のそれはやむ得ないものとしても、対外金融債権のリスクも一考を要する。

四

また先の貿易理論では、要素価格の均等化という命題が導かれる。資源的に土地の狭い日本は、土地を大量に用いる生産物（農畜産物や鉱産物）を輸入している。それらのお陰で日本の地価は、この程度に安い水準ですんでいると解釈する方が良い。現在の生活水準を維持しながらそれらの農畜産物を自国で生産するとすれば、地価は驚くべき高い水準になるであろう。この命題は、方向性として現実に作用している。

しかしそれは完全には現実化しない。それを妨害する諸要素があるからである。もし要素価格均等化が完全に現実のものとなると、為替相場は全ての財とサービスについて購買力平価仮説が妥当する筈である。しかし長期的に為替相場は、貿易財について購買力平価仮説が妥当しているというのが、経済学者たちの見方である。

話がここまで来ると、人々はなぜお盆や正月などに海外旅行に大量に出かけるのであろうか。海外を経験したいという選好体系それ自身の問題はあるが、海外へ旅行する利益が消費者を誘因している。北海道へ行くより、ハワイ等へ行く方が相対的に安いという経済的誘因である。現実の為替相場は、旅行者が楽しむ全ての財やサービスで測った購買力平価と比べると、遙かに円高である。貿易財に関して、円は十分に高く評価されている。海外旅行にも、経済学が必要となる。

貿易理論という抽象的な議論は簡潔ではあるが、大きな現実を彷彿させる。その意味で経済理論は、俳句のようなものである。その抽象力が、経済学の魅力なのであろう。

五

近年で読んだテキストとして感心した著書に、Barro and Sala-I-Martin: *Economic Growth* (1995,McGraw-Hill)があった。そこには多数の経済成長に関する文献が述べられている。なかでも Uzawa 教授の「物的・人的資源」の水準が経済成長を決定するモデル(“Optimum Technical Change in an Aggregative Model of Economic Growth”, *International Economic Review*, Vol.6, No.1, 1965)が分かり易く説明されている。例えば戦争などで物的資本が破壊されたとき、十分な人的資本が用意されていると、物的資本の建設のために高い経済成長が可能になるというモデルである。それは、高度成長期の現実を想起させる。しかし日本経済の技術水準が、欧米の水準になると、成長率は低下することになる。

しかし今後の日本経済について、どのように考えればよいか。特に人的資本に関して、今後の日本経済の成長を如何にすべきか、その発想の基礎となるであろう。無資源経済の今後は、それを如何に処すべきか、それが問われている。

経済学について書くことは色々あるが、ここで述べたいことは、以下のことである。上記では経済学を例にとったが、著書については、文章の書き方としては、俳句の世界が理想的であるように思える。短い文章で、自然と人的環境、人間の知性と感情の壮大な風景を呼び起こすことができれば、理想的である。それは、自らへの叶わぬ願いでもあるが。

さらに、一般的に論文では、最初に要約が述べられる。世界中で多数の優れた論集が発表されている。個人が読むには、それらの数は無限大に近い。読者はそれぞれに自らの関心をもっている。要約は、そのための導きである。著書については、その「はしがき」がその役割を演じるであろう。

モデルは、現実をいかに抽象し簡潔な命題に仕上げるか、それを読む人々に大きな現実を想起させることが使命となるのであろう。抽象力の作業が、経済学には問われている。未来への解のために。

古典的な名著作を連ねていくと、現状の理解と困難の打開の途を教えてくれるように思える。

六

もっとも、論争については留意することも必要であろう。経済学では、ケインズ派と新古典派との理論的相違はある。著者のものの考え方はそれぞれあるが、その（思想的）相違と「仮定—推論—結論」という理論の相違とを区別することは必要である。考え方の相違は、理論では仮定の設定の仕方に現れる。しかしそれらは仮定の設定を明示すれば、理論上の齟齬は発生しない。

たとえば成長経路について、それが不安定であるか安定であるかは、両派の議論の対象のひとつである。それは、

ケインズの「美人コンテスト」、ハロッドの「ナイフ・エッジ」、「群れ行動」等、景気の波動に関する研究は、今後も絶え間なく続けられるであろう。

しかし均衡成長経路に関しては、両派の理論に差違は認められないようである。それは Uzawa: "Neutral Invention and the Stability of Growth Equilibrium" (*Review of Economic Studies*, Vol.38, 1961) によって証明されている。効率単位で測った労働（ある一人の労働者が、基準点からつぎの時点で二倍の生産性増加を得ていると、その労働者は二人として計算される）で考えると、差違は消滅する。

また、新古典派(Barro and Sala-I-Martin)のEconomic Growthでは、ケインズ派（ハロッド）の中立的技術進歩を受け入れている。両派は、論理的に妥当なものに関して、接近の度を深めている。

それぞれの理論家の努力の成果に依拠し、しないでも良い論争は避けるのが望ましい。

これに関連しては、今回のバブルもそうであるが、人々はなぜあの様に愚かしい行動をとるのであろうか、市場のシステムや企業内組織は短期的にも有効か、その改善の方向はどのようなものか等の市場と組織の安定性に関する研究が必要となるであろう。

上記の「群れ行動」仮説(Scharfstein and Stein: "Herd Behavior and Investment", *The American Economic Review*, Vol.80, No.3, 1990) では、組織のなかの経営者の効用関数に、「他の経営者が成功しているときに自分が失敗すれば評判が低下する、多くの他の経営者が失敗するとき自分が失敗しても自らの評判は低下しない」という要素が入ると、なにが生じるかを問うている。それぞれの経営者は個人情報をもっているとしよう。市場が買いの動きのとき、個人情報（売り）を放棄して、買いに回る経営者が発生することになるであろう。それは、市場を動かす。

それは、個人投資家の行動ではない。経営者が取り扱う資金は、預金者、被保険者などの組織の信用によって集めた他の人々の基金である。それは、企業という組織のなかの経営者の行動に関している。企業内賞罰のシステムを含め、今後バブルの発生を減少することは可能であろうか。

市場と企業が合理的に機能するための、組織と個人の行動原理が求められる。それらを支える政治と行政の在り方も題材であろう。解を求めて、経済学には考えることが多々あるようである。

こうして仮説の構築とその検証がなされるであろう。人々の行動は果たして短期的にも合理的であろうか、またはそのシステムの改善は可能であろうか。抽象的に述べれば、短期に関し予想の安定性の議論は、今後も続けられるであろう。その結果として、経済政策の必要性など、議論がなされるであろう。

（大阪経済法科大学経済学部教授）

■読書の周辺

古典の運命——ギリシア文学はどれだけ残ったか

中務哲郎

紀元前四〇一年、ペルシアのキュロス王子は、実兄アルタクセルクセス王に対する謀叛の軍を興し、リュディア地方の古都サルデイスを発ってバビロンを目ざした。キュロスの傭兵となった一万余のギリシア人は、行軍の真の目的も告げられぬまま東へ東へと進んだが、キュロスのあっけない討死によって敵地の真っ只中に取り残されることになる。これから後はペルシア軍の謀略、原住民の襲撃、雪深いアルメニア山岳地帯の難行軍、と苦難の連続であったが、このギリシア兵を統率し、小アジアのペルガモンまで導いて帰ったのが、ソクラテスの弟子、アテナイ人クセノポンであった。

クセノポンは後に閑暇を得て、この時の従軍記録『アナバシス』を著すことになるが、大部分が敵地からの撤退の記録である書物を「アナバシス（攻め上り）」と呼ぶのはおかしい、と不平を鳴らす人は一人もいない。それどころかこの本は、軍隊における人間模様、危機に際してのリーダーの判断、六〇〇〇キロに及ぶ行程の行く先々で出会う民族の風習への関心、大軍に通過される現地人の態度、いずれの観点からも魅力に溢れ、英国の作家ギッシングなどは、ギリシア語で書かれた作品がこの『アナバシス』ひとつしか残されていないとしても、ギリシア語を学ぶ価値がある、と述べているほどである。

さて、この本の終り近くでクセノポンは興味ぶかい思い出を記している。心ならずもトラキアの豪族セウテスの配下に入り、近隣諸部族の掃討に従事する時のこと、黒海西岸のボスポロス海峡に近い辺りに位置するサルミュデッソスという所で、こんな光景を目撃した。

……やがてサルミュデッソスに到着した。ここでは黒海へ入ろうとする多数の船が砂に乗り上げて難破していた。海岸に浅瀬が広く連なっているからである。この辺りに住むトラキア人たちは、標柱を立てて境界を示し、それぞれ自分たちの領域に難破した船の物資を奪う。境界をきめる以前は、掠奪の際に争い合って、双方に多数の死者が出たという。ここで多数の寝台や箱や書物、その他船主たちが木製の容器に詰めて運んでいたさまざまな品物が見付かった（『アナバシス』七・五・一二以下、松平千秋訳、岩波文庫）。

これはわれわれの先祖も知っていた、というより、時には作りだしさえした光景ではないか。生命を支えるに足る生産が不可能な島や沿岸に住む人々にとっては、食糧や木材を打ち寄せてくれる難破船はまたとない恩恵であった。流木や死魚や海藻といった自然の寄物（よりもの）を待つばかりでなく、

年の始めにこの一年に難船の多からんことを祈る風習が各地にあったし、沖に悪風の吹く時には、松明を持って浜辺を往来し、港を探す船を暗礁に誘き寄せるようなことさえ行われたという（宮本常一他監修『日本残酷物語1　貧しき人々のむれ』平凡社）。

クセノポンの記録に誘われる思いはもうひとつある。見付かった多数の寝台や箱や書物というのは、トラキア人が金目のものを奪い去った後の残り物であったかもしれない。潮水に濡れそぼつ本（パピルスの巻物）は一体どれだけ拡げて乾かされ、本としての生命を回復したであろう。また、多数の書物とあるからには、この本は個人の旅の友などではなく、ギリシアからの輸出品であったろう。アテナイでは紀元前五世紀には本屋業が興っていた。しかしまた、多数とはいっても、同じ書物のコピーが多数であったとは考えにくい。一字一字写しとって複製を作るしかなかった時代、本の「出版部数」は極めて少なかったはずである。クセノポンが見たものの中には、この時この浜辺で永遠に失われてしまった天下の孤本はなかったであろうか。

ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』（二・五七）によると、クセノポンには一五の著作があるというが、幸い全てが現存する。しかし、時はあらゆるギリシア作家にこれほど優しいわけではない。ギリシア文学はどれほど失われ、どれほど残ったのであろうか。

ホメロスの作と伝えられる『イリアス』と『オデュッセイア』（前八世紀後半）は、トロイア戦争の遠い原因からトロイア滅亡後数十年の事件までを扱った、「叙事詩の環」と呼ばれる八篇の詩の一部であった。八篇は出来事の順序に従って次のように配列される。

㈠『キュプリア』キュプロス島のスタシノス、またはヘゲシアスの作、一一巻。㈡『イリアス』二四巻、一五六九五行。㈢『アイティオピス』ミレトスのアルクティノス作、五巻。㈣『小イリアス』ミテュレネのレスケス作、四巻。㈤『イリオンの陥落』ミレトスのアルクティノス作、二巻。㈥『帰国物語』トロイゼンのアギアス作、五巻。㈦『オデュッセイア』二四巻、一二一一〇行。㈧『テレゴノス物語』キュレネのエウガモン作、二巻。

トロイア伝説を歌った叙事詩は少なくともこれだけ知られているのに、今に伝わるのは『イリアス』と『オデュッセイア』のみである。これ以外の作品については、プロクロス（五世紀、新プラトン派の哲学者）に帰される『文学要覧』からポティオス（九世紀、コンスタンティノプルの総主教）が抜萃した記事によって梗概を知るしかない。この梗概は岡道男『ホメロスにおける伝統の継承と創造』（創文社）付録で邦訳を読むことができるが、作品そのものからは、例えば『キュプリア』の断片四九行、『帰国物語』の断片三行が残るのみである。

「叙事詩の環」を形成する諸詩の中から、残るものと消え去るものとを分けたのは、緊密な構成・作品としての統一性の有無であったと思われる。『イリアス』は五〇日足らずの事件を語る間に、トロイア戦争の原因からトロイア滅亡の予感までを歌いこんでいるし、『オデュッセイア』も四十数日を語りながら、二〇年に及ぶオデュッセウスの冒険と息子の成長を説き尽くしている。これに対して他の叙事詩は、多様な事件を単純に順を追って叙述しただけのようである。アリストテレスによると、歴史記述に要求されるのは行為の統一性ではなく時間の統一性であり、同じ

時間内に起こったことはすべて無差別に記述されるから、個々の出来事の間に必然的な関係がないことも多い。これに対して、「叙事詩の筋は、悲劇の場合と同様に、劇的な筋として組みたてられなければならない。すなわち、それは、初めと中間と終わりをそなえ完結した一つの全体としての行為を中心に、組みたてられなければならない」(『詩学』一四五九a、岡道男訳、岩波文庫)。多くの叙事詩人が歴史記述に似た作り方をするのに対して、トロイア戦争に関する様々な出来事の中から一部だけを取り出して中心主題とし、他は挿話として処理したホメロスは神のようだ、とアリストテレスは評するのである。

「叙事詩の環」の詩以外にも有名無名の詩人による叙事詩が作られたが、アポロニオス・ロディオス『アルゴナウティカ』(前三世紀)以外は失われた。

叙事詩に続いて抒情詩のジャンルが生まれたが、その中で最も名高い詩人はサッポー(前七世紀後半生まれ)であろうか。ギリシアの詩人は九柱のムーサイ(ミューズ、詩神)の霊感を受けて詩を作ったとされるが、レスボス島のサッポーはプラトンによって「十番目のムーサ」と称えられるほど古代より令名が高かった。彼女の作品はアレクサンドレイア文献学の盛時、ビュザンティオンのアリストパネス(前三、二世紀)の手で校訂され、詩神の数に因んで全九巻に編まれた。祝婚歌、讃歌等のテーマによって巻が分けられていたらしく、第一巻が約一三〇〇行を含むところから、全体の分量が推測されるのである。

これだけの作品が紀元後二、三世紀にもなお大部分残っていたと考えられる。ところが、キリスト教世界は異教の文学に寛容ではなかった。三八〇年頃、コンスタンティノプルの総主教ナジアンゾスのグレゴリオスによってギリシアの恋愛詩が大量に火中に投ぜられた時、サッポーの詩はその蛮行の最大の標的であった。さらに、この厄を辛うじて生き延びた作品も、一〇七三年、教皇グレゴリオス七世による焚書によって完全に地上から姿を消してしまった。現在われわれが手にする「サッポー詩集」は、多種多様な古代文献にたまたま引用されて残る断簡零墨を、近代の学者が見つけ出し、編んだものにすぎない。完全な姿をとどめるのは二八行から成る「アプロディテ禱歌」ただ一篇、他はすべて断片である。「九巻あったと伝えられるレスボスの詩女神(ムーサ)の作品の九十パーセント以上は、二千五百年あまりの歳月と、愚かなキリスト教徒の手によって、永久に失われてしまった」(沓掛良彦『サッフォー　詩と生涯』平凡社)。

三大悲劇詩人については、一〇世紀に編まれた文学百科事典『スーダ事典』や中世写本に付された「作家伝」などによって、それぞれの創作の数を知ることができる。それによると、アイスキュロス(前五二五頃－四五六年)の作品はすべて九〇篇、あるいは七五篇とされるが、今日残るのは七篇にすぎない。ソポクレス(前四九六／五－四〇六年)は多作で、一二三の悲劇を作ったと伝えられるが、現在まで伝わるのは同じく七篇のみである。エウリピデス(前四八五頃－四〇六年)は九二の劇を作り、『スーダ事典』では七七篇が現存すると記されているのに、今では一九篇しか残っていない。その中『レソス』は偽作の疑いが濃く、『キュクロプス』は悲劇ではなくサテュロス劇というものである。三大悲劇詩人の作品の生存率は、ごく大雑把に計算すれば一一パーセントということになる。

紀元前五三四／三年、アテナイの大ディオニュシア祭でテスピスが初めて悲劇を上演した、との伝承は信じがたいとも言われるが、ともあれこの頃、悲劇の競演がアテナイの国家的行事として組織された。やがてサテュロス劇――一説に、悲劇の緊張を解きほぐすための滑稽劇と解釈される――が導入され、演劇コンテストには三人の作家がそれぞれ悲劇三篇とサテュロス劇一篇を提出することが制度化された。毎年三人の作家が計一二の芝居を上演したから、前五世紀の百年間だけで一二〇〇の悲劇とサテュロス劇が作られたことになる。しかも、三月末の大ディオニュシア祭に出場できるのは選ばれた三詩人であって、前年の夏か秋に行われる予選に落ちた作家がいる。さらに、大ディオニュシア祭だけではなく一月のレナイア祭でも、喜劇と並んで悲劇の競演が行われた。してみると実に夥しい数の劇が作られたはずであるが、完全な形で今に伝わるのは、悲劇三二篇とサテュロス劇一篇のみである。

多くの劇が失われた原因の一つは、コンテストという上演の形式にある。悲劇はコンテストで賞を得ることを目的に作られたから、優勝あるいは二等三等を勝ち得た作品は、そのタイトル・作者・合唱隊（コロス）の費用を負担した人物などが大理石に刻まれ記録されたが、選にもれた作品はたちまち忘れ去られた。優勝するほどの作品でさえ、本来一回きりの上演のために作られたのであり、好評を博して数十年百年の後に再演されるものは僅かしかなかったのである。

喜劇も悲劇と同様に、大ディオニュシア祭やレナイア祭での競演のために作られた。そして残されたものも、悲劇と同様に少ない。テオドル・コック編『アッティカ喜劇詩人断片集』には一六八人の作家の名前と一四八三篇のタイトルが見えるが、今日完全な形で読むことができるのは二詩人の十数篇のみである。

アッティカ喜劇はふつう三つの時期に分けられる。アテナイの黄金時代から、アテナイがペロポネソス戦争に敗れ覇権を失うまでの時代に作られた古喜劇（前四八〇頃－前四〇〇年頃）、激しい政治批判や個人攻撃、大らかなエロティシズムが影をひそめ、代わりに筋が複雑化していったと考えられる中喜劇（前四〇〇頃－前三三〇年頃）、ヘレニズム時代の幕開きに対応する新喜劇（前三三〇年頃以降）、である。

古喜劇、というよりギリシア喜劇を代表するアリストパネス（前四四五頃－三八〇年頃）は四〇余りの喜劇を作ったが、現存するのは一一篇のみである。中喜劇は七〇年程の間に千を越す作品が量産されたと考えられるのに、今日に伝わるものは皆無である。

新喜劇のメナンドロス（前三四二／一－二九三／二年）の古代における評価には極めて高いものがあった。人情の機微を穿ち人生の哀楽を描いて間然する所がなかった彼の作品を評して、ほぼ百年後のビュザンティオンのアリストパネスは、「ああ、メナンドロスと人生よ、御身らは、どちらがどちらを模倣したのか」と歌い、メナンドロスを凌ぐ詩人はホメロスのみ、と称えた。これほどの作家がやがて顧みられなくなることについては幾つかの理由が考えられる。まず、道楽息子の色恋沙汰、正式の結婚と内縁関係、捨て子との再会、実の兄妹のニア・ミス、といった話題が頻出する彼の作品は、学校の教材から排除された。次に、二世紀以後のローマ世界で一種のギリシア文学復興運動が興ったが、そこで範とされたのは紀元前五世紀のギリシア

語であり、時代の下がるメナンドロスのギリシア語は軽視された、という事情がある。

メナンドロスにはしかし、今世紀になって再発見された作品もある。一九〇五年、ナイル河流域のアプロディトポリスで六世紀のローマ人法律家の邸宅が発掘され、壺に納めた文書を保護するためのパピルスが、実はメナンドロスの五つの喜劇を含む写本の再利用であることが発見された。さらに、発掘地や入手経路は明らかにされていないあるパピルスには、『気むずかし屋』の全九六九行が筆写されていたのである。

メナンドロスにはこの他、名言集に採られて残る章句も多いが、それらを全て合わせても、われわれの持つメナンドロスは全体の八パーセント程にすぎぬと見積もられている。

散文についてはただ二人の例を見るにとどめておこう。

ローマ皇帝ティベリウスに寵愛された占星術師トラシュロス（後三六年死）は音楽や哲学に関する書物も著したようだが、彼の説によると、プラトン（前四二九頃－三四七年）はその対話篇を悲劇詩人と同様四部作の形で出版し、真作と認められるものは五六篇であったという（ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』三・五六以下）。この数は、『国家』一〇巻と『法律』一二巻をそれぞれ一と数えると三六となり、われわれが持っているプラトンの作品数と見事に一致する。紀元前後に存在したプラトンの作品が、今もそっくり残っている、ということである。しかも、古代人が知っていてわれわれが知らないプラトン作品はないと考えて大過ないということであるから（田中美知太郎『プラトンⅠ　生涯と著作』岩波書店）、われわれは「プラトン全集」を持つ、と言ってもよいのである。

これに対して、アリストテレスの孫弟子になるパレロンのデメトリオス（前三五〇頃－二八〇年頃）の著作の運命はどうであったか。「政治にはすぐれているが学者としては凡庸だとか、博学ではあるが政治にはあまり通じていないとか、そういう人ならいくらでもあげることができるのだが、しかしこの両方の面ですぐれていて、学問研究においても国家行政においても第一人者であるというような人物は、このデメトリオス以外には、ざらに見つかるものではない」（キケロ『法律について』三・六。中村善也訳）と評されたデメトリオスには、四五点の著作があったと伝えられる（ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』五・八一）。しかし、今日まで生き延びたものは一つもない。著作リストの中から僅かに一篇、「アイソポスの集成　一巻」と呼ばれるものが、われわれの持つ『イソップ寓話集』の基礎であったか、と推測されるのみである。

人間が生まれおちた瞬間から死の危険に晒されているように、書物も、湮滅の危機の中へと生み出される。千年以上にわたって創られ続けたギリシア文学の中、今日に伝わるものはごく僅かにすぎないが、われわれとしては、惜しみても余りある喪失を悲しむべきか、二千数百年も、よくもこれ程生き残ってくれたと喜ぶべきか、どちらであろう。書物には散逸の危険と同様に、「作られ過ぎ」の弊もあるのではないかと思いつつ、古代の本の運命に思いを馳せてみた。

（京都大学教授・西洋古典学）

大学出版部協会創立三十五周年を迎えて

――大学出版部いま転換の時期

山下　正

1．大学の変化とそのゆくえ

大学出版部協会は一九六三年六月十一日に設立総会を開催しており、本年六月、創立三十五周年を迎えることになる。去る四月二十四日の一九九八年度総会において、新しく三重大学出版会の加盟が承認され、協会メンバーは二四大学となったが、九州大学出版会には九州全県及び山口県の二八大学が加盟、名古屋大学出版会には県下の四大学が協力校として参加しており、これらを加えると、全国五六大学を網羅する一大学術出版団体として成長してきた。

ここ数年、大学は急速に変わりつつある。二十一世紀に向かって、社会の変化に対応した新しい「改革」が模索されてきている。大学の機能と役割には、研究と教育、そして社会サービスの三つがいわれるが、①研究機能中心の大学院重点型、②生涯学習等のニーズに応える社会サービス重視型、③教育機能中心の学部重視型、というように、それぞれの大学が三機能を総合化していく方向に進むのか、あるいは特化していく道を選ぶのか、大学は揺らいでいる。最新の動向をみると、例えば、学部をもたない大学院大学の登場、複数の大学による連携大学院や連合大学院の試み、衛星通信システムを活用した遠隔授業や複数キャンパスの双方向授業の出現、多様なコース・受け皿で個性化をめざす短大の模索、地域おこしの願いをこめる地方自治体の大学づくりへの挑戦等々、大学はどこへ行こうとしているのか。大学出版部にとっては、大学の変化とそのゆくえは見過ごすことができない。

2．協会活動の新しい課題

このような状況を背景にしながら、大学出版部協会はさまざまな活動を展開してきているが、とくに、この五年間で、活動内容の大きな変化を指摘することができる。協会活動の運営は幹事会が中心だが、日常活動は編集部会、営業部会、刊行助成部会の三部会が担っている。ここではそれらの活動の問題点と課題に触れておこう。

(1)『大学出版』

協会の機関誌『大学出版』は創立三十周年を記念して、一九九三年から季刊（四・七・一〇・一月）刊行を実現した。現在、三七号（一九九八年春）まで発行されている。創刊は一九八六年五月だが、当初の年二回刊行を一九九一

年から三回にし、季刊への軌道にのせたわけである。

今日、大学改革が進展する中で、例えば協会には未加盟だが出版部をもつ大学、新しく出版部の設立をめざす大学はじめ、多くの大学関係者の関心に応える点からも、『大学出版』の果たすべき役割は一層大きくなってきている。協会キャッチフレーズの「大学と社会を結ぶ知のネットワーク」づくりの文字どおりの推進役として位置づけるならば、『大学出版』の内容も、今後は、大学出版部と協会活動を中心にしながら、さらに大学や図書館、自治体など大学をとりまく環境や問題状況を意識したもっと幅広い視点に立った編集企画が目ざされるべきだろう。

(2) 図書館へのアプローチ

各出版部の刊行書籍は圧倒的に学術書が多い。各出版部とも、それぞれ独自の販売方針で営業活動を行っているが、同時に、大学出版部協会として共同して学術書の普及・販売をめざすことは極めて重要である。そのためいくつかの活動を継続的に実施してきているのが営業部会だが、とくに、①『新刊速報』の作成・配布、②図書館への納本業務は着実に成果をあげてきている。

『新刊速報』は協会加盟出版部の毎月の刊行全点を掲載したもので、現在一四六号（一九九八年六月）まで発行、最も早く、正確な選書資料として図書館で利用されてきている。そして、「新刊書の見計い納本」制度は図書館・書店・協会の三者が覚書を取り交わし、新刊書を刊行のつど各出版部の責任で取次店・書店経由で図書館へ納本するもので、現在全国九〇館を越える図書館で採用されている。

日本の出版流通は雑誌中心で、書籍の取扱いはどうしても副次的になるが、学術書・専門書はさらに厳しい状況にある。だからこそ、協会としては自らの努力で学術書の販売可能性を追求することが欠かせない。このシステムを理解し、採用していただける図書館の数をさらに一段と意識的に増加させることが何よりも重要視されるべきだ。

(3) 出版助成

一九八〇年からはじまった日本生命財団の大学出版部協会への出版助成は今年第二〇回を迎えたが、これまでに、①史料の保存・研究、②心身の健康、③環境の三分野を対象に、総額五億四八四万円の助成が行われ、二〇四点の学術書が刊行されてきた。この制度は日本生命財団が大学出版部協会を通じて傘下出版部に出版助成を行うものだが、すぐれた研究成果も採算上の問題で出版が困難な状況に対して、継続的な援助は大きな励みとなっている。

刊行助成部会では、①学術研究成果の出版に対する助成の必要性と重要性の提起、②各種出版助成の現状調査・分析、③助成出版の理念やルールづくり、を新しい課題としているが、こうした活動は学術出版の担い手としての協会に不可欠のものである。

(4) 国際交流

協会活動の大きな柱の一つとして国際交流がある。大学

出版部は世界的な存在であり、これまでに各国の出版部との交流がさまざまな形で行われてきている。とくに、協会設立の際はアメリカ大学出版部協会の経験に学び、活動の方針や組織のあり方を参考にしてきている。

昨年はじめて実施した日・韓・中三国大学出版部協会合同セミナーは、東アジアにおける出版交流の現状と将来にとって画期的な意義をもつといえるかもしれない。これが実現できるまでには、それなりの準備段階があった。日・韓大学出版部協会は一九八二年から九六年までの十五年間にわたって、交互に相手国を訪問し、共同セミナーの開催を中心に出版交流を進めてきた。一九九六年には「日韓大学出版部協会共同図書展」をソウルで開催した。一方、日・中大学出版部協会の交流は一九八一年と一九九〇年の二回、「日本・大学出版物展覧会」を北京ほかで開催した。また、一九八八年には双方の代表がそれぞれの研修会、記念会で講演を行った経験を持っている。

このような日韓、日中の交流を経て、ようやく三国セミナーがスタートしたのである。今年八月二十七日、第二回が北京で開催されるが、今後は、三国セミナーを軸としつつ、アジアにおける学術出版交流と大学出版部の組織化を視野に入れながら推進していくべきだろう。

3．転換期の大学出版部

ここ数年、大学出版部の設立をめざす大学がとくに多くなってきている。その要因として次の二点が考えられる。

第一は、大学における研究と教育の成果の「発信基地」として出版部を必要としている点である。大学改革にともない、大学の自己評価や開かれた大学づくりといった課題に応える点からも、自前で発表機関を持つことが大きな意味をもつといえる。第二は、大学が「生き残りの戦略」としての魅力ある大学づくりの一環として出版部を位置づけている点である。二十一世紀に入ると、一八歳人口は一二〇万人を切る。現在と同じ進学率（四〇％）とすると、大学生の数は五〇万人と予測され、現在より三〇万人減少することになる。この事態を前にして、大学は生き残りが緊急の課題になっている。と同時に、従来のように八〇万人の大学生が存在するためには六七％の進学率、実に三分の二が入学することになる。となると、それを受け入れる大学そのものが目的や内容を大きく変えなければならなくなる。

このような大学そのものの大変容に直面して、大学出版部もまた大きな転換の時期を迎えている。大学出版部は「出版という仕事を通じて大学の機能に参加する」という基本枠組を踏まえながら、同時に、例えば、大学と地域社会の関係をコーディネイトするとか、大学と市民を結ぶ広報センターとか、もっと別の新しい役割や機能に挑戦していくことが期待されているのではないか。

（東京大学出版会・大学出版部協会幹事長）

歩く・見る・聞く
知のネットワーク 11

アール・デコの館と名画とのハーモニー

東京都庭園美術館を訪ねて

ふらんすへ行きたしと思へども
ふらんすはあまりに遠し
せめては新しき背広をきて
きままなる旅にいでてみん。
（萩原朔太郎作『純情小曲集　旅上』大正十四年発行）

目黒白金台にある東京都庭園美術館は、朔太郎が夢見た大正末期頃のフランスで一世を風靡したアール・デコ様式をそのまま残しているというので行ってみた。それは期待通りアール・デコの館だった。現代人は新しい背広を着ずともフランスに行けそうだ

美術館への道は平成から大正へのタイムトンネルのようだった。目黒駅からビルが建ち並ぶ歩道を首都高速2号線に向かって歩いていくと、木々が生い茂った森が見えてくる。首都高速や目黒通りを走行する車の喧噪を避けるように森に入る。門扉から美術館までの樫や椎の木立の下を歩くうちに心がだんだんと落ち着いてくる。このゆるやかな道程がこの地を訪れた者を無理なくアール・デコの世界にタイムスリップさせてくれる。

このアール・デコの館が美術館になったいきさつも興味深い。この館は一九三三年（昭和八年）浅香宮鳩彦邸として建てられたという。当主浅香宮鳩彦陸軍中佐は明治天皇の第八皇女と結婚し、大正十一年フランスに留学。ところが翌年思いがけず交通事故を起こし、妃殿下とともにパリで長期療養をすることとなる。当時のパリを中心としたヨーロッパは植物をデザインしたアール・ヌーボ調が飽きられ、実用的で単純・直線的なデザインを特徴とするアール・デコと呼ばれる装飾様式が流行していた。パリに暮らす両殿下は一九二五年開催のアール・デコ博覧会を見学、斬新なデザインに魅了されて帰朝する。そして浅香宮邸を建てるときには壁紙やシャンデリア等をフランスから直輸入し、日本に唯一のアール・デコの館を完成させる。そして戦後の一時期、外務大臣公邸、迎賓館として使用され、一九八三年（昭和五八年）、東京都庭園美術館として一般に公開

東京都庭園美術館入口

されるようになった。

簡素な二階建ての白い洋館が美術館である。白壁に近代性を感じながら車寄せから玄関に入ると、アール・デコの代表的宝飾デザイナー、ルネ・ラリック作の女人像が四体、女神のような翼を広げて来館者を迎えてくれる。乳白色のガラスは豊かな胸ときゃしゃな姿態の女神が孔雀のように羽を広げている様子を浮き彫りにしている。館内のライトを背後に受け、優美に浮き出ている女体に緻密で精巧な芸術性を感じる。このガラススクリーンの素晴らしさが来館者に建物の中の様子をより一層期待させる。

玄関ガラスの女人像の次は、大広間横に置かれた天井にとどきそうに高く優美にそそりたつ塔に圧倒される。これはフランス国立セーヴル製陶所作の香水塔で、黒大理石の水盤の上に白磁の発光器がワラビ手型に見事な曲線を描いている。パーティのときに香水塔の水盤には花が活けられ、頂部のワラビ手型には香水がふりかけられ、ライトで温められた発光器が香水を芳しく匂い立たせてパーティを盛り上げたという。美術館として開放される前には幻のアール・デコの館と呼ばれ、神秘なベールに包まれた建造物だったという話に納得する。

訪れたときの展示は「華麗なる馬たち―馬と人間の美術史・バロックから近代まで―」。客間、食堂、浅香宮・妃殿下や若宮の部屋に名画が架けられている。部屋一杯に大きな絵が展示されているときには感じなかったが、アール・デコ調の壁に架けられた小品の名画を見ているとフランスの貴族のサロンで芸術の粋を鑑賞しているよう錯覚する。鑑賞者と美術品とを遮るガラス越しにしか芸術品を鑑賞できない所では味わえない、作品とその鑑賞空間との間の調和に今までにない満足感をおぼえる。この美術館では建物と美術品とのハーモニーを是非味わってもらいたい。

（明星大学出版部　松井　昭代）

アール・デコ様式の室内
（提供・東京都庭園美術館）

東京都庭園美術館
〒108-0071　東京都港区白金台５－21－９
☎03－3443－0201
開館時間　テレホンサービスに確認のこと
　　℡　03－3443－8500
休 館 日　毎月第２・第４水曜日
　　（祝日の場合は開館、翌日休館）
　　年末年始　その他
交通案内　山手線・東急目蒲線目黒駅東口より
　　徒歩７分

大学出版部ニュース

付・ウェッブ上の大学出版部

▼インターネットの急速な普及に伴い、大学出版部でもその可能性を探る試みが多く行われるようになってきました。現在、協会加盟出版部の半数を超える一四の大学出版部が、正確な意味でのホームページと言えるかどうかはともかく、ウェッブ上での広報・普及活動を展開しています。そこで本号では、新たに加盟した三重大学出版会の「ニュース」に続けて、その紹介を掲載いたしました。これらはすべて、五月末にスタートした大学出版部協会のホームページにリンクされていますので、ご参照・ご利用いただければ幸いです。

大学出版部協会ホームページ
http://www.lian.com/AJUP/

北海道大学図書刊行会

▼菊池馨実著『年金保険の基本構造―アメリカ社会保障制度の展開と自由の理念』（A5判・八五〇〇円）　一九三五年社会保障法の制定から八〇年代まで、年金保険を中心にアメリカ社会保障制度の歴史的展開と全体像を分析。日生助成図書。

▼保原喜志夫編著『産業医制度の研究』（A5判・五〇〇〇円）　一九七二年制定の労働安全衛生法による制度のしくみ、活動の実際、その法律問題、諸外国との比較など、産業医制度に関わる問題と改善策を法律学の立場で網羅した初の成書。

▼小林真之著『株式恐慌とアメリカ証券市場―両大戦間期の「バブル」の発生と崩壊』（A5判・七八〇〇円）　一九二九年恐慌をアメリカ証券市場の歴史の中に位置づけ、株式恐慌の分析を通して二〇～三〇年代のアメリカ経済の実態を解明。

▼小島廣光著『非営利組織の経営―日本のボランティア』（A5判・四五〇〇円）　近年多くのNPOが社会ニーズの充足と市民の社会参加実現のために活発な活動を展開している。我国NPOを対象とする実証研究の成果を踏まえ、そのマネジメントの特徴と課題を提示した意欲作。

聖学院大学出版会

▼『ユルゲン・モルトマン研究』〈組織神学研究第一号〉（組織神学研究会編、二〇〇〇円）　J・モルトマンは、W・パネンベルクと並び称される現代ドイツの代表的神学者である。『希望の神学』など、現代の政治思想との係わりで日本でもよく知られ、その主要著作のほとんどが翻訳されているが、「モルトマンについての研究がそれほど多くはないというわが国の学界の状況にいくらかでも貢献できればという願いをこめて」（あとがき）出版された。「バルトとモルトマン」（大木英夫）、「死者の居場所をめぐって」（佐藤司郎）「『神の像』としての人間理解に基づく教育的展開」（朴憲郁）などの六論文を収録している。

慶應義塾大学出版会

▼〈福澤研究センター叢書〉『三田演説会と慶應義塾系演説会』（松崎欣一著、八〇〇〇円）は、福沢諭吉とその周辺の人々による「演説」と「演説会」の実践の跡を当時の新聞記事などからたどった大著である。また、『第一次世界大戦と日本海軍－外交と軍事との連接』（平間洋一著、四〇〇〇円）は、日本の参戦が他に広範な影響を与えたことを外交と軍事作戦との連係に視点をあてて論証する。

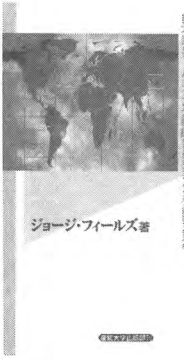
▼〈Ｋｅｉｏ　ＵＰ選書〉では、新資料や埋もれていた記録により福沢の多彩な顔を活写した『福沢諭吉の横顔』（西川俊作著、二二〇〇円）、中国の文学・歴史・風俗・食味などを滋味豊かに描いた『奥野信太郎　中国随筆集』（奥野信太郎著、二三〇〇円）、サイバー社会に向けての現状と課題を多角的に検証する『ディジタルメディア革命－21世紀の人間／社会／教育』（徳田英幸他著、二〇〇〇円）が刊行された。

▼『KEIO SFC REVIEW』No.2（慶應義塾大学湘南藤沢学会編、一四二九円）は、「グローバル・コモンズ」の特集のもと、地球の持続的な繁栄を考える。

産能大学出版部

▼『世界市場争奪戦』（ジョージ・フィールズ著、一八〇〇円）

日本企業は改善に象徴される応用の才を活かして経済大国を築き上げた。これまでアメリカ・東南アジア・ヨーロッパ地域で展開された日本企業のマーケティングは、その成功の故に海外の関心を引いたが、このジャパニーズ・マーケティングは今後も通用するのか。また、何が日本的と捉えられたのか。これからの世界市場で日本企業が直面する様々な問題、地域戦略とグローバル戦略の違い、資本主義モデルの違いがもたらす市場戦略の違い、情報を核とする資本による世界市場戦略との衝突、多国籍企業の日本市場参入等、グローバルに変化する市場環境要素を具体的なケースで検討する。



専修大学出版局

▼西川利行『経済法の基礎－新たな人間像を契機に』（二四〇〇円）近年のわが国の金融不祥事や汚職事件の根本に、近代法治国家における個人利益追求行為の露骨な形が潜んでいることは疑いない。またバブル期の経済行程は、そのような利益追求の極みにあったと後世から評されるだろう。本書は、明確な経済憲法観の確立をみたといわれるドイツ・ワイマール憲法下の経済法学説を検証し、近代法治国家の経済法の本質と意義にせまるものである。さらに生産協同体の基礎や、協同体法の対象や目的にもふれている。

▼法律の本というといつも横組み縦組みのことを考える。

日本国憲法を始め日本の各種諸法令から、役所の出す官報は縦組みである。それに加えて日本の法律は、技術的な官僚用語が多く、文章も難解だ。市民がもっと法律に身近にかかわり合えるようにするためにも平易に書かれたものが必要ではないか。その一歩として法律書をもっと横組みにしてはどうか。でないとデジタル時代、世界的グローバル・スタンダード化に遅れることになる。

玉川大学出版部

▼昨年七月に発足した日本高等教育学会の編集で『高等教育研究』を創刊した。第1集のテーマは『高等教育研究の地平』（三〇〇〇円）。年一回刊行予定。

▼定松正編『世界・日本　児童文学登場人物辞典』（八〇〇〇円）

「子どもたちに読書の楽しみを味わってもらう手だてを大人が共通して探れるようにと企画した。世界と日本の児童文学の古典から現代にいたる作品に登場する人物の特徴をわかりやすく解説している。項目数は四百十二。作品・登場人物の重要度に応じて記述の分量が三段階に分かれ、重要なものには作者の紹介が付くなど立体的なつくり」（朝日新聞四月二六日付書評）

中央大学出版部

▼小野ゆり子著『娘と女の間　―コレットにおける母娘関係と男女関係の交差―』（本体一一五〇〇円）

今世紀前半の仏女性文学を代表する作家コレットは、彼女以前の女性作家たちが口を閉ざしていた女性の欲望や肉体的感覚を女性の側から表現し、文学における女性のイメージを書き換えた。

本書は、コレットの文学世界を、小説で語られる男女関係と、自伝的著作での母娘関係との交差によって織り上げられ、変化する世界と捉える。そして、その視点から、男女関係における女の「私」のイメージと、女性同士の関係性から立ち現れる「私」の歴史的変遷を跡付け、小説と自伝的著作とのはざまで、恋する女であり、母の娘でもある新たな「私」が創出されていく特異な過程を分析する。

東海大学出版会

▼R・レイメント／阿部勝巳訳『地球科学の巨人たち―科学者の素顔に迫る』A5変形　本体二八〇〇円

科学者に関する伝記や評伝を読むと著作の内容は、科学者が科学の分野でどんな貢献をしたかということを中心に据えて、彼らの私生活に関する事柄にはほとんど触れられていない。それは、あたかも彼らが油をたっぷりさされた機械のように働き、現実世界と接触するのは機械の運行を維持するために睡眠をとったり定期的に食物をとったりする時だけで、その他の自分の研究以外の事には全く関心がなかったかのような書き方である。しかし偉大な科学者たちといっても、我々と同じように家庭に悩みがあり、悲しみ、経済的な問題を抱え、病に倒れ、酷い仕打ちに遭い、資金調達のあてもないのに仕事を抱えたりした。本書ではそんな名を残した科学者と忘れられた科学者たちの私生活を覗く。科学者列伝＋地球科学入門＋エッセイである。

東京大学出版会

戦後に小会が発足して、その翌年に、丸山眞男著『日本政治思想史研究』を刊行した。これは今も版をかさねているが（本体価格　三二〇〇円＋税）、戦中に書かれた輝かしい記念碑的作品といえよう。そして当時より戦後の長期にわたって、先生は東大法学部において日本政治思想史の講座を担当された。

はなばなしい論壇での活躍のかたわら、先生はこの講座に心血を注いでこられ、毎年度、新たに講座案を作って臨まれている。こうして学生に語りかけるかたちで概説された新しい思想史学は、日本の思想的伝統（じつは無思想ともいうべき伝統）と対決し、古代から近代までを射程に収めた画期的な日本思想史の通史を形づくった。

このたび刊行を開始した『丸山眞男講義録』全七冊は、先生の急逝とともに遺された丹念な講義草稿・ノートを本文として、当時の学生の筆記ノートによって、実際の講義の復元をめざす。第一冊『日本政治思想史　一九四八』（本体価格三二〇〇円＋税）からスタートする。

東京電機大学出版局

ホームページに掲載する内容や情報そのものをコンテンツと呼ぶ。コンテンツ産業ともいえる出版社がCD－ROM辞書やインターネットで新たなサービスを提供する例が増えている。海外の学術雑誌でも論文のデジタル化が進んでいる。

情報を一方的に提供し、その画面の表現もユーザー次第のホームページならばHTMLでよかったが、文書構造を持つ論文や再利用の高いデータ、定期的に配信されるレイアウト主体の雑誌などを表現するために新たな技術が研究されている。なかでもHTMLの限界を打ち破る技術としてXMLが注目されている。

▼川俣晶著『XMLコンテンツの作り方』（二一〇〇円）会話形式を用いて解説するなどインターネットの最新技術を楽しく読めるように工夫を凝らした。

『XMLコンテンツの作り方』

東京農業大学出版会

▼『日本庭園の特質』　進士　五十八（本体四七六二円）

初版『日本庭園の特質』に英文解説を増ページした改訂版。

本書は、従来とは異なる手法で、日本庭園の特質を分析・考察したもの。

「計画論的視点で、造園史的にアプローチすること、あるいは、具体的庭園を数量分析的にアプローチして、その基本的フレームや平均的イメージを明らかにすることを試みた。」

と著者は語っている。

構成は、第一部では、日本庭園の様式的特質としての時代性、地域性、政治性、人間性、精神性、造形性を解明するのにふさわしい事例を分析。第二部では、日本庭園の空間的特質である囲繞性、空間構造と形式、モデュールとヒューマン・スケール性、曲線の独自性について記述。第三部では、日本庭園の景観的特質の典型である縮景、借景、樹藝、時間美について、数値などで計測される視覚構造の面と、その背後にあって日本庭園らしさを感じさせている精神構造の面を総合化する方向で考察。

法政大学出版局

▼坂井洲二著『ドイツ人の家屋』四六判上製・図版五〇〇点／三六〇〇円

『エコノミスト』評（抄録）…ドイツの地方都市では、歳月を経た古い民家が多く残り、比較的新しい家も、統一性があり美しい。これに対して、日本の家の多くは、かつての美しさをなくし、何の脈絡もない顔つきをしている。ぺらぺらで、造っては壊し、造っては壊しというなんとも情けない状況である。

著者は、建築家ではなく、民俗学が専門の学者である。高度な技術的専門知識ではなく、好奇心をもとに調べ上げている。知り合いの普通のドイツ人が行う建築確認から設計、工事、建材、棟上げの祝い事など、完成に至るまでの経緯を紹介する。大手住宅メーカーの商品化住宅が幅をきかす日本とはまるで違う。

放送大学教育振興会

▼平成十年度の新刊図書は六十七点。放送大学の十年度開設科目三百十四に含まれ、履修登録をした学生たちの手許に、三月末日までに届けられた。

▼新刊図書の履修科目登録者数のトップテンは、①『英語Ⅱ』②『児童の臨床心理』③『フロンティア人間科学』④『老年期の心理と病理』⑤『日本の自然』⑥『人生の哲学』⑦『生活学入門』⑧『調理とおいしさの科学』⑨『発達心理学』⑩『経営学入門』となっている。

▼放送大学の開設科目は「生活と福祉」専攻（生活科学、健康科学、福祉関係）、「発達と教育」専攻（教育学、心理学）に特性があり充実している。卒業をめざす学生（全科履修生）の約半数はこの二専攻に属していて、関連図書の需要もかなり多い。前記②、③、④、⑨、『心理学入門』『カウンセリング』、⑦、⑧、『成人の健康科学』『看護学概論』『骨と関節の健康科学』『消費者問題の展開と対応』等がそれである。

▼引き続き平成十一年刊行予定の図書七十一点、二百名以上となる執筆陣は、取材、執筆、校正にと、おお忙しである。

明星大学出版部

▼伊藤満・栗田章光・鈴木博之・吉川紀共著『鋼道路橋の建設・管理』

近年、橋梁技術は材料・理論・製作技術・架設工法など、目覚ましい進展をとげている。夢の架け橋といわれた本州と四国を結ぶ長大橋梁もつぎつぎに実現し、都市間を結ぶ高速道路も数多く建設されている。

本書は、従来の橋梁工学の教科書とは異なり、対象を鋼を用いた道路橋の上部工に限ることにしたことにより、大学を卒業して実務に携わる若い技術者が、計画、製作架設から管理までを理解しやすいように配慮した内容となっている。すなわち、実用性に主眼をおき、必要最少限の内容としているのが、本書の特徴である。

▼明星大学理工学部数学研究室編『数学の基礎と演習』

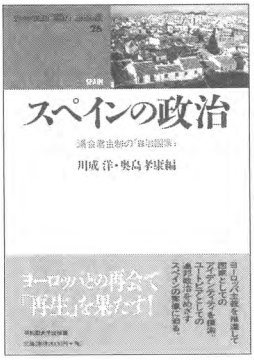
高校の数学教育は、数学Ⅰのみが必修科目で、数Ⅱ以上の科目は選択科目になっている。その選択の仕方も多種多様であるため、極端な場合は数Ⅰのみで大学に進学している。理工系学生のための数学の基礎を学習する教科書として刊行。

早稲田大学出版部

▼〈ワセダ・オープンカレッジ双書〉①『早稲田派エコノミスト列伝』（原輝史編）、②『生涯学習と高等教育』（奥島孝康・原輝史編）［各二五〇〇円］を刊行した。本双書は早大エクステンションセンター主催の公開講座を収める新シリーズ。

▼〈早大蔵資料影印叢書洋学篇〉（全18巻）が、⑯『遠西独度涅烏斯草木譜V』（杉本つとむ編、三二〇〇〇円）の配本で完結した。セットでの購読をお薦めする。

▼〈ワセダ・リブリ・ムンディ〉㉖『スペインの政治』（川成洋・奥島孝康編）、㉗『スペインの経済』（戸門一衛・原輝史編）、㉘『スペインの社会』（壽里順平・原輝史編）［各二九〇〇円］は、EUへの積極的な参加によって、南欧型社会からの脱皮を図るスペインの現状をとらえる。



名古屋大学出版会

▼飯田祐子著『彼らの物語―日本近代文学とジェンダー―』（三二〇〇円）明治三〇年代から大正期にかけて近代文学が芸術として自立していく過程は、文学という領域そのものが新たな構造のもとにジェンダー化していく過程でもあった。ホモソーシャルな読者共同体の成立にいたる転換を精緻に分析。

▼花里孝幸著『ミジンコ―その生態と湖沼環境問題―』（四三〇〇円）湖の食物連鎖の中で重要な役割を担うミジンコと他の生物達は複雑な生物間相互作用を保ちながら生態系を維持している。本書では人為的な環境改変の影響が微細な生物を介して生態系全体に及ぶ過程を解説。

▼J・スチュアート／小林昇監訳・竹本洋他訳『経済の原理―第1・第2編―』（一二〇〇〇円）『国富論』に先立ち、理論・政策・歴史の諸領域を統合した最初の経済学体系の全訳ついに完成。

▼加藤弘之著『中国の経済発展と市場化―改革・開放時代の検証―』（五五〇〇円）改革・開放後の中国の市場経済化の独自性と特質は何か。独自の視点から実証的に解明。第一四回太平正芳記念賞。

京都大学学術出版会

▼『語る身体の民族誌―ブッシュマンの生活世界1』菅原和孝著・三〇〇〇円／奔放な「恋人関係」の噂、「糞」や「肛門」の語が飛び交うののしり、動物や食べものについての不思議な語り――ブッシュマンの愉快で猥雑な会話には、原野で生きる人々の精神世界と社会構造とが鮮やかに織り込まれている。〈精緻な会話記録〉という新しい民族誌の方法を示し、人類学の可能性を探る会心作。

▼『住空間史論I』島村　昇著・八〇〇〇円／白山連峰の山村は、住居建築において原始・古代へ遡及可能な住居形式を残存させていた。本書は緻密な現地調査を踏まえて、これら山村住居の架構手法・空間秩序等から住空間の成立形成過程を詳細に跡づけている。

▼『重力波をとらえる―存在の証明から検出へ』中村卓史他編著・八〇〇〇円／重力波は、長いあいだ理論上予測された存在にすぎなかったが、近年の電波天文学の進展にともない、観測に基づいて実在が立証され、また、レーザー干渉計などを用いた直接検出の試みも始まっている。本書はその最新の成果である。

大阪経済法科大学出版部

今回は四月ということもあって学内向テキストの紹介を。

▼康祥隆監修『大阪経済法科大学　コンピュータの基礎』（B5・二〇〇〇円）

本書はコンピュータ入門の学内統一テキストとして企画編集された。

ウインドウズ上でオフィス97のアプリケーションを使用する初心者にとって親しみやすいものにするため、章構成にストーリィ性を持たせたり、操作中の画面を忠実に、しかも鮮明に表現することに努めた。

そのため、文章を手直ししたり、学生が教室で使用するパソコンの画面にとり直したり、画像のファイルをJPEGからビットマップに変更する等、行った。

本書は、学内向のテキストであり、大学のネットワークシステムの説明等があり、一般書店や他大学へ配本するのに少し向いてないが、コンピュータ入門のテキストに関心のある人はぜひ御購読をいただき御意見・御助言をお寄せください。

四月に発行した他のテキストとして、

▼『ゼミナール現代法入門』一四〇〇円

▼『現代社会と人権』一六〇〇円

大阪大学出版会

翻訳書の位置づけは各UPそれぞれ個性がある。本会では、単なる翻訳は本学でなされた研究成果とはいえないので、出版しない立場をとる。言語文化交流に貢献しうるものか、訳者の研究内容が盛り込まれていて原著者との共著的な要素があることを条件にしている。後者の見本のような翻訳書ができた。

▼C・E・ブレネン著／辻本良信訳『ポンプの流体力学』A5・七二〇〇円。

ポンプは古くて新しい機械である。スペースシャトルやHⅡロケットのエンジンにも生きている先端技術で、本書ではそこで派生した振動とキャビテーションの問題を中心に詳説。補遺「ターボ機械の不安定現象」を訳者により加筆。

▼本会は誕生して満五年、ひとつの節目をむかえた。その一：右記の書でバックリスト三〇点に達し、大学出版部協会の準会員から正会員に昇格したこと。その二：ここまで陣頭で強力に指導してこられた脇田修会長が退任されたこと。後任は、本学で学生部長、副学長の要職を歴任してこられた松岡博教授（法学部）。いっそうの良書刊行を誓いたい。

関西大学出版部

▼泉澄一著『雨森芳洲の基礎的研究』（四〇〇〇円）江戸時代の朝鮮外交に活躍したと誤って説かれる雨森芳洲について、対馬藩の記録をもとに徹底的に検証を加え、その非を明らかにし、芳洲の実相に迫ったもの。対馬藩の記録に通暁した筆者が藩改組織を復元し、その中に芳洲を位置づけ、藩儒としての日々を克明に跡づけた最初の本格的な論考。▼飯田紀彦著『逃避の病理』（二五〇〇円）一見豊かで平和な社会で育てられ、快適な日常生活を満喫しているかに見える現代の若者たち。しかし、ある者は自らの役割を放棄し、置かれた状況から逃避し、引きこもってしまう。本書はそうした若者の逃避と引きこもりを生物学、精神病理学、社会病理学の多角的な視座から詳細に分析し、考察を加える。▼神楽岡幼子解題『青本黒本集』（二四〇〇〇円）「日本小説書目年表」に未記載で従来、所在の知れなかった稀覯本を中心に収録。保存状態が良好で、原装のまま残っているものもあり、各巻の絵題簽も揃っている。所蔵していた子どもの署名や年号の墨書があるのも貴重。

九州大学出版会

▼仁保喜之・石橋大海編『内科学進歩のトピックス』（A4判・四〇六頁・八〇〇〇円）。赤池紀扶他編『脳機能の解明』（B5判・六二二頁・七五〇〇円）。内科学、神経科学それぞれの研究の最近のトピックスを網羅する。▼R・J・バーロ、X・サラ-イ-マーティン／大住圭介訳『内生的経済成長論』（A5判・I巻四〇八頁、II巻四一六頁・各五六〇〇円）。現在、経済学のうちで最も活気のある研究領域「内生的成長論」に関する優れた文献であり、理論研究と実証的研究が統合されている。ほとんどの章に、数式の導出過程を含む多数の訳注を付す。▼デ・ブロイン／恒吉法海訳『ジャン・パウルの生涯』（四六判・三九八頁・三六〇〇円）。トーマス・マン賞、ハインリヒ・ベル賞の旧東ドイツの著名作家によるジャン・パウルの伝記の決定版。ジャン・パウルは貧しさの中からドイツで最初の自由な作家の地位を確立し、女性の讃仰者達を得、偉大な風刺家、小市民の代弁者となった。その言動の矛盾等を指摘しながら、その生涯をフランス革命から王制復古の時代背景の中で描き出す。

東北大学出版会

▼尾坂芳夫著『心の豊かさをつくる技術知』（二九一三円）工学者である著者は、科学技術の発展が将来にわたり人類の繁栄をもたらす確信は得られ難くなっているとみる。それは、科学技術からの実利を享受しようとする欲望が、その負の効果に対する精緻な判断を鈍らせているからである。本書は、技術分野で誇りと確信をもって仕事に打ち込もうとする若い人々と一緒に、科学技術と人間の問題を根底から考えようとする情熱に溢れている。▼細谷昂著『現代と日本農村社会学』（五〇〇〇円）著者の長年にわたる農村社会学研究のうち「家」と「村」にかかわる成果を編成したもので、日本の農業と農村の構造と変動が一貫した主題である。二部構成で、第一部でマルクス、ウェーバーなどの学説研究によって巨視的な社会の構造と変動に関する視座を得、第二部で個別的農村地域の構造と変動の実証分析がなされる。この二つの異なるアプローチは商品経済研究の一点で交わるのである。▼父阿部次郎の知られざる姿を再現した大平千枝子さんのエッセイなどを載せた「宙」3号が発行されました。

流通経済大学出版会

▼流通経済大学教授生田保夫著『交通学の視点』（A5判・約三〇〇頁・予価三五〇〇円）七月発行予定

『人間社会の諸活動は、総て何らかの形で人、物、情報の場所的移動を通じて行われている。今日、我々の社会はグローバルな移動空間の中で様々な交流が行われ、ダイナミックな発展を遂げているが、それらはこの移動行為、すなわち広い意味での交通を行うための様々な手段が開発されることによって可能になってきた。

この「交通」という行動を対象として、その特性を分析、解明していくことは、交通が人間社会のなかで如何に基本的な行動として存在しているかを理解する機会を与え、それを社会の中により効果的に組織化していくことの必要性を改めて強く認識させることにもなる。そうした意味からも、交通は種々、様々な観点からする接近方法を通じて研究されねばならない存在であると言えよう。本書はこうした見地から交通の本質を明らかにしつつ、それが社会の中に如何に位置付けられ評価・発展されていくべきかを理解する上での視点を与える。』

三重大学出版会

三重大学出版会は一九九八年一月に発足したばかりの清新な団体である。三重大学教職員等の学術出版物の刊行はもとより、地域社会の新しい文化の育成を責務として、出版業務を行う点に特色がある。

いまよりほぼ十年前、一九八八年九月に三重大学出版会設立準備懇談会を発足させたのが、当会のそもそもの起りである。その五年後には大学出版会設立にむけた準備機関として三重学術出版会（初代会長　安達六郎）を設立した。それからは順調に出版物を刊行し、人文・社会・自然科学の多岐にわたる専門的な学術書、大学の共通教育で用いるテキスト類等に及ぶ図書総計三二点を公刊してきた。

今までの課題は大学に拠点を置く組織ネットワーク型のボランティアとして活動してきたが、今後の課題は事務所の開設と維持、在庫管理等の実際の業務体制作りに取り組むことになる。更に進めて、地方の大学として人材を生かした組織の活性化、制作と販売の改善に新路を求めて、取り込む予定にしている。

http://www.seig.ac.jp/seig_04/unipress.html

聖学院大学出版会

開始日　一九九七年七月
更新回数　不定期

▼当出版会は法人全体のホームページの中の一コーナーとして掲載されており、スタッフ不足のため、まだ独立していません。計画としては、既刊書のリストを完成させ、新刊発行の際に更新する、という一般的な段階をまず考えています。主な本については写真を入れるようにしていきます。

▼大学内の総合研究所とも密接な関係にあるので、関連項目の効果的なリンクを行いたいと考えています。現在、少しずつではありますが、前進している状況です。

http://www.sannopub.co.jp/

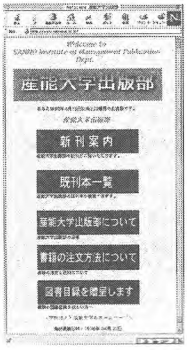
産能大学出版部

開始日　一九九七年九月
更新回数　約月一回

▼当出版部のホームページには、絶版書籍を除く全ての書籍の情報が見られるようになっており、新刊に関しては書籍カバーの画像データもおさめられている。いわば、書籍目録のインターネット版である。

▼すべて手づくりで運営してきたもので素人の域を出ていないが、徐々に利用勝手のよいページに改善していきたいと思う。実際に開設して感じたことは、かなり娯楽性の高いものにするか、専門性の高いものにしなければ、見てもらえないということである。

▼今後の課題は、利用者のターゲットをどう絞り込んで内容を充実させていくかにあると思う。



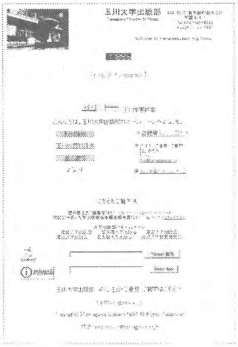
玉川大学出版部

http://www.tamagawa.ac.jp/SISETU/UP/

開始日　一九九六年四月
更新回数　月一回

▼小部では一九九五年頃からホームページによる書籍の紹介を計画し、HTMLファイルを書きためていましたが、九六年四月の玉川学園の全学ホームページ公開の折に一般公開し、新刊案内や注文の受付をはじめました。『全人教育』誌、新刊案内の更新は月に一回、各編集担当者が行う取り決めになっています。ご覧になった方からメールによる書籍の問い合わせや月刊誌の定期購読の申し込みもあります。

▼今後の課題として検索エンジンの導入、PDFファイルによる書籍内容の一部紹介、Javaによる見て楽しめるページ等を考えています。



中央大学出版部

http://www2.chuo-u.ac.jp/up/

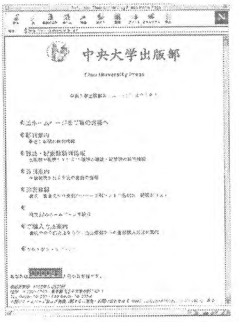
開始日　一九九八年三月
更新回数　週一回

▼小部のホームページは、読者に手軽にかつタイムリーな刊行状況を知っていただきたく開設された。

▼デザインはシンプルであるが、著者、書名、シリーズ・ジャンルで検索ができるなど、機能性は高い。

▼試行錯誤をくりかえし、完成までに七ヶ月を要した。出版部の設計に基づきアルバイトの学部生が製作を担当。費用は総額十万円(人件費込)である。大学のサーバを使用しているため維持費は無料。データ更新は小部の中村・松井が担当している。

▼現在公開されている大学出版部のホームページで、唯一書協のブックスリンクに対応している。



東京大学出版会

http://www.utp.or.jp（休止中）

開始日　一九九五年一月
更新回数　月一回

▼小会のホームページの内容は、新刊案内、重版・復刊案内、トピックス、注文書、復刊リクエスト、その他となっています。希望者には直接電子メールで、新刊案内を送付していますが、その数は約八百名に達しました。アクセス数は月に二万弱、そのうち国内からのアクセスは一万三千となっています。

▼今まで借アドレスで運用してきましたが、都合により一時休止しています。秋には独自のドメインで再開する予定です。

▼作成は宣伝部で行なっています。

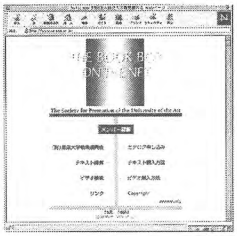
http://www.ua-book.or.jp/

放送大学教育振興会

開始日　一九九六年九月
更新回数　不定期

▼当会のサイト“THE BOOK BOX ON THE NET”は、書籍・ビデオ教材データを、教材名・著者名・専攻分野から検索するデータベース型サイトです。現在、リピーターを増やすためにメンバー登録ページを設け、新刊情報等を定期的にMLにて提供しています。また、このメンバーのデータに基づいてユーザー像の把握が可能となり、ネット活動の一助となっています。

▼さらに、サイバー書店や書籍データを集結したサイトと相互リンクを張ったり、当会で配布しているカタログにURLを載せたりと、サイトの広報活動を行っています。



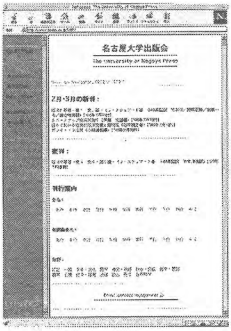
http://www.suntec.co.jp/UNP/

名古屋大学出版会

開始日　一九九七年一月
更新回数　月一回

▼開設の目的は、新刊予定の情報をより早く提供すること、全書籍の内容を提供することです。作成は、すべて内部で行いました。まず印刷会社から入手した図書目録のテキストデータをエディターに入力し、編集部と営業部が分担してHTML言語にしたがい各自のコンピューターで加工し、それをファイルにしてLANで営業部のコンピューターに集結させ、FTPでプロバイダーに送信し公開に至りました。

▼新刊情報は編集部がワープロで作成したものをLANで取り込み、営業部で加工し、プロバイダーに送信しています。



http://ha1.seikyou.ne.jp/home/Kyoto-UP/

京都大学学術出版会

開始日　一九九七年一二月
更新回数　隔月一回

▼「おたくの刊行物は、いったいどの書店にあるのですか」――悲しいかな、初版千部なにがしの学術版元には、こういった問い合わせがしばしばある。本にアクセスしにくい状況は、特に地方の研究者にとっては致命的な問題だろう。そうした事態を少しでも改善したいと思い、書物の内容紹介閲覧と注文受付ができるHPを開設した。開設後四ヶ月で、例えば英文の宇宙物理学書には、Eメールで三〇件以上の注文があるなど、確かに効果はある。今後は書目の目次・著者紹介に加え、〈著者からの一言宣伝〉なども入れて、より使いやすいものにしていきたい。

http://haの後の1は，ローマ字のエルではなく数字のイチです。お間違いなきようお願い致します。

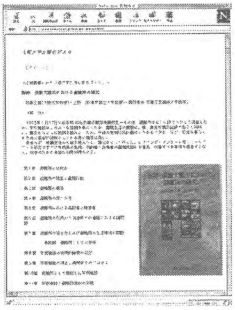
大阪大学出版会

http://www.osaka-u.ac.jp/osirase/osirase.html

開始日　一九九七年四月
更新回数　不定期

▼『大阪大学』のホームページの中に「大阪大学出版会」のページがある。既刊本すべての書名・著訳編者名・判型・頁数・本体価格・送料・日本図書コードを掲載。新刊についてはカバーの写真、特色などの紹介文と目次も入れている。六月中には単独のホームページを開設の予定。書協の『BOOKS』、大阪大学、大学出版部協会のホームページともリンクさせる。

▼学術書は息が長い。十年後にも必要とする研究者・学生が入手できるように図書目録と同様の強力な情報源として機能させたい。



関西大学出版部

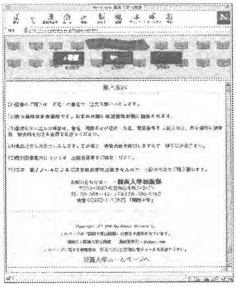
http://www.kansai-u.ac.jp/Syppan/sp0.htm

開始日　一九九六年一〇月
更新回数　不定期

▼本学出版部のページは、大学による「関西大学ホームページ」の一部として、より多くの方々へのPRをめざして運用を開始しました。

▼開設に際しては、本学学生に協力を仰いだので初期費用は学生への報酬のみ。維持費についても、出版課で更新していますので実質ゼロといえます。開設後の反応については、直接受注は行っていませんので目に見える形ではないのですが、アクセス数の伸びを見ますと、読者へも確実に浸透しているようです。

▼今後は書名・著者名など各種索引の付加、ビジュアル面での強化等をめざし、更なる充実を図る予定です。



九州大学出版会

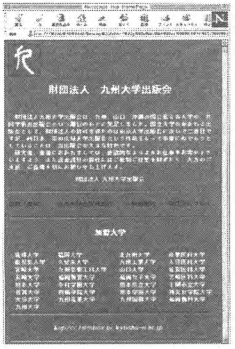
http://www.rc.kyushu-u.ac.jp/~higuchi/kup/

開始日　一九九七年四月
更新回数　不定期

▼小会評議員の提案・協力により開設。図書目録の内容（組織の紹介、出版物案内、注文方法等）をほぼそのままの形で掲載している。

▼URL変更の可能性があるため、現在、日本書籍出版協会にのみリンクを張っている。新刊案内、役員の変更等の更新は編集部で不定期に行っている。

▼今のところメールによる問い合わせはそれほど多くはないので、リンクを増やし、広く紹介できる体制を整えたい。また、定期的な更新、画像を利用したページ作り、英文による紹介、検索エンジンの導入等が今後の課題である。

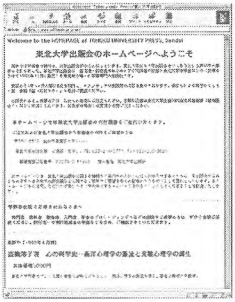


東北大学出版会

http://www.sal.tohoku.ac.jp/up/

開始日　一九九六年一一月
更新回数　不定期

▼東北大学出版会は、一九九六年一一月三〇日に発足したばかりである。認知度、販路、刊行点数、広告媒体などの限られた小会にとって、ホームページは財政的なコストがかからないので、新刊書などの広告媒体として、また小会の活動や存在意義をひろく理解していただくために、会報『宙』（無料）とともに、発足時からその役割を重視してきた。反響も大きい。会則や役員リスト、設立の経過などに関する情報も提供している。作成は編集担当理事の教官が担当し、新刊書刊行にあわせて更新するよう努力している。カラー化、ビジュアル化が今後の課題である。



流通経済大学出版会

http://www.ryukei.ac.jp/rku/rkup/

開始日　一九九八年五月
更新回数　不定期

▼小会の母体である流通経済大学のホームページ立ち上げは一九九六年であり、現在までに入試センター、就職部、図書館等についてはご覧いただける状態であります。

▼小会のページもその一つとして開設したものです。上記のURLで直接アクセス可能ですが、できれば流通経済大学のホームにアクセスしていただき、他のページもご覧いただければ幸いです。

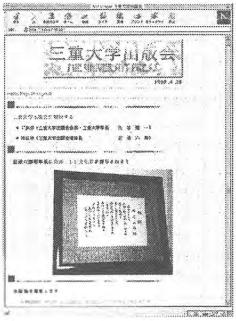
▼内容は、取りあえず既刊出版物のご案内のみですが今後更に整備して参りますと共に、新刊書発行の都度更新します。ご注文は、メールでお受けいたしますのでご利用下さい。

三重大学出版会

http://133.67.45.22/

開始日　一九九六年四月
更新回数　不定期

▼三重大学出版会の前身を三重学術出版会という。自費出版物を刊行するボランティア組織で、モットーは無利益・無在庫・無借金の「ネットワーク型出版会」だった。この出版会は市販の図書の六〇％で図書を制作することができたが、問題はその図書が売れないという事態だった。この事態を改善する一助として一九九六年度から「三重学術出版会ホームページ」を開設して宣伝に努めた。しかし結果は芳しくなかった。少なくともネットワークを通じて注文を受けたケースは一例もなかった。そのため今はホームページの効果的な使い方を検討中である。



新刊案内 '98・4〜'98・6

■北海道大学図書刊行会
朝天虹ヲ吐ク―志賀重昂『在札幌農學校第貳年期中日記』　亀井秀雄・松木博編著　七五〇〇円
近世蝦夷地農作物地名別集成　山本　正編　三二〇〇円
「市民」の時代―法と政治からの接近　今井弘道編著　二四〇〇円
野生動物の交通事故対策―エコロード事始め　大泰司紀之・井部真理子・増田　泰編著　六〇〇〇円

■聖学院大学出版会
ユルゲン・モルトマン研究　組織神学研究会編　二〇〇〇円

■慶應義塾大学出版会
コミュニケーション研究―社会の中のメディアー　大石　裕　三二〇〇円
北里大学誕生の記　長木　大三　二七〇〇円
ディジタルメディア革命―21世紀の人間／社会／教育―　徳田英幸・梅垣理郎・武藤佳恭・村井純・花田光世・田村次朗・斎藤信男　二〇〇〇円
巖谷小波日記　翻刻と研究　桑原三郎編　七〇〇〇円
KEIO SFC REVIEW No.2　慶應義塾大学湘南藤沢学会編　一四二九円
〈講演集2〉学ぶ楽しみ　生きる喜び　慶應義塾大学通信教育部編　一二〇〇円
データ分析入門　片岡正昭編　三五〇〇円
モビリティ社会への展望　富永健一・宮本光晴編　三五〇〇円
〈講座　人間と福祉　障害者とともに〉教育・就労・医療の最前線　E・スカーヌルス、J・クレーゲル、C・フィチテン、T・ドーラン講演／小谷津孝明・小松隆二・冨安芳和共編　三三〇〇円
正論自由　第十三巻―アジアにおけるパワーゲーム―　中村　勝範　二四〇〇円
未来を創るこころ　石川　忠雄　二二〇〇円
人間性を育てる教育　古畑　和孝　二四〇〇円
慶應義塾の教育論　三田教育会編　二〇〇〇円

■産能大学出版部
夢指向型組織の時代　内田　友美　一五〇〇円
米国カテゴリーキラーの販売革命　内田　武之　二〇〇〇円
人格は創り変えられる　鬼木　豊　一八〇〇円
セブン-イレブンだけがなぜ強い　石川昭・根城泰　一六〇〇円
営業所を強くする破壊の戦略　工藤恒夫・永田仁　一六〇〇円
運をつかむ人 のがす人　さい　ふうめい　一五〇〇円
あなたを変える67の時間習慣　松崎　俊道　一六〇〇円
世界市場争奪戦　ジョージ・フィールズ　一八〇〇円
なぜキレる　岡田　永治　一四〇〇円
「脱日本」金融資産㊙運用　滝沢哲夫・今泉大輔　一六〇〇円
新・VEの基本　土屋裕監修　二二〇〇円
生産ルネッサンス　西塚　宏　三八〇〇円

■専修大学出版局
経済法の基礎―新たな人間像を契機に―　西川　利行　二四〇〇円

■玉川大学出版部
世界・日本 児童文学登場人物辞典　定松　正編　八〇〇〇円
イギリス高等教育と専門職社会　H・J・パーキン／有本章・安原義仁編訳　三〇〇〇円
臨床教育学と感性教育　高橋　史朗　三〇〇〇円
打ち砕かれた夢－アメリカの魂を求めて－　W・T・デイヴィスJr／大類久恵訳　四二〇〇円
シュライアーマッハーの哲学　W・H・プレーガー／増淵幸男監訳　六四〇〇円
人形劇のプレゼント　清水俊夫編　二八〇〇円
大学授業の心得－数学の教え方をとおして－　S・G・クランツ／蓮井敏訳　二四〇〇円
教育学における「近代」問題　H・E・テノルト／小笠原道雄・坂越正樹監訳　六五〇〇円
学びのデザイン－生涯学習方法論－　赤尾勝己・山本慶裕編著　三〇〇〇円
悪い習慣　J・バーナム／森田幸夫訳　四五〇〇円
高等教育研究の地平〈高等教育研究第1集〉　日本高等教育学会編　三〇〇〇円

■中央大学出版部
法律家を目指す諸君へ－一九九八年度版－　中央大学法職講座運営委員会編　二〇〇〇円
英国ルネサンスの演劇と文化　中央大学人文科学研究所編　五〇〇〇円
ツェラーン研究の現在－詩集『息の転回』第一部注釈－　中央大学人文科学研究所編　四七〇〇円

■東海大学出版会
中国のチョウ－海の向こうの兄弟たち　青山　潤三　一六〇〇円
大学の日々から－現場からの教育論　松前　紀男　三〇〇〇円
乱流入門　H・テネケス、J・L・ラムレイ／藤原仁志・荒川忠一訳　三八〇〇円
地球科学の巨人たち－科学者たちの素顔に迫る　R・レイメント／阿部勝巳　二八〇〇円
北欧の外交－戦う小国の相克と現実　武田　龍夫　五〇〇〇円
ビザンツ帝国史　尚樹啓太郎　一五〇〇円

■東京大学出版会
新・知の技法　小林康夫・船曳建夫　一六〇〇円
シェイクスピアへの架け橋　高田康成・河合祥一郎・野田学編　二九〇〇円
歴史の対位法　義江彰夫・山内昌之・本村凌二編　二四〇〇円
家族〈東京大学公開講座66〉　二六〇〇円
教育心理学Ⅱ－発達と臨床援助の心理学－　下山晴彦編　二九〇〇円
現代中国－移行期の政治社会－　天児　慧　二五〇〇円
心情の変容〈情報社会の文化4〉　島薗進・越智貢編　二四〇〇円
近未来を設計する－〈正義〉〈友愛〉そして〈善・美〉－　中西　洋　三八〇〇円
哺乳類の生物学4－社会－　三浦　慎悟　二六〇〇円
A History of Shōwa Japan, 1926-1989　中村隆英／Edwin Whenmouth訳　九〇〇〇円
帝国議会貴族院委員会速記録　昭和篇99　国立国会図書館所蔵　一三〇〇〇円
帝国議会衆議院委員会議録　昭和篇135　国立国会図書館所蔵　一七〇〇〇円
丸山眞男講義録　第一冊－日本政治思想史一九四八－　丸山　眞男　三二〇〇円
ナショナル・ヒストリーを超えて　小森陽一・高橋哲哉編　二三〇〇円
近世都市社会の身分構造　吉田　伸之　六四〇〇円
越境する文化と国民統合　増谷英樹・伊藤定良編　五四〇〇円

信頼の構造－こころと社会の進化ゲーム－　山岸　俊男　三二〇〇円
経済復興と戦後政治－日本社会党一九四五－一九五一年－　中北　浩爾　六二〇〇円
20世紀システム4－開発主義－　東京大学社会科学研究所編　三八〇〇円
日本資本主義の構造と展開　大石嘉一郎　五八〇〇円
現代農業政策の経済分析　生源寺真一　五八〇〇円
哺乳類の生物学1－分類－　金子　之史　二六〇〇円
生命と時間－生物化学入門－　川口　昭彦　二六〇〇円
井上毅伝外篇　近代日本法制史料集　第十九－諸氏雑纂一－　國學院大学日本文化研究所編　六〇〇〇円
帝国議会貴族院委員会速記録　昭和篇100　国立国会図書館所蔵　一三〇〇〇円
帝国議会衆議院委員会議録　昭和篇136　国立国会図書館所蔵　一七〇〇〇円
哺乳類の生物学2－形態－　大泰司紀之　二六〇〇円
デザイン・テクノロジー・市場〈情報社会の文化3〉　嶋田厚・柏木博・吉見俊哉編　二八〇〇円
アメリカ研究案内　阿部斉・五十嵐武士編　三六〇〇円
オーストラリア入門　竹田いさみ・森　健編　三二〇〇円
中国の重層集権体制と経済発展　趙　宏偉　五六〇〇円
物価の経済分析　白塚　重典　四八〇〇円
野の医療－牧畜民テャムスの身体世界－　河合　香吏　二九〇〇円
発達史地形学　見塚　爽平　三四〇〇円
天体と軌道の力学　木下　宙　四六〇〇円
新編　色彩科学ハンドブック［第2版］　日本色彩学会編　三六〇〇〇円
帝国議会貴族院委員会速記録　昭和篇101　国立国会図書館所蔵　一三〇〇〇円
帝国議会衆議院委員会議録　昭和篇137　国立国会図書館所蔵　一七〇〇〇円

■東京電機大学出版局
電気電子材料〈理工学講座〉－導電性制御とエネルギー変換の実際－　松葉　博則　二七〇〇円
高周波計測－マイクロ波通信からデバイスまで－　森屋俶昌・関和雄　二二〇〇円
上水道と給水装置〔新版〕　榮森康治郎　二八〇〇円
MATLABによる制御系設計　野波健蔵編著　四〇〇〇円
XMLコンテンツの作り方　川俣　晶　二一〇〇円

■東京農業大学出版会
日本庭園の特質－様式・空間・景観　進士五十八　四七六二円

■法政大学出版局
近代天皇制国家と民衆・アジア（下）　松尾　章一　四二〇〇円
経営財務論　内藤　三郎　二八〇〇円
パロールの奪取　M・ド・セルトー／佐藤和生訳　二三〇〇円
稲－品種改良の系譜－〈ものと人間の文化史86〉　菅　洋　二八〇〇円
探偵小説あるいはモデルニテ　J・デュボア／鈴木智之訳　四〇〇〇円
上田秋成「春雨物語」の研究　東　喜望　一九〇〇円
アメリカ演劇10－デイヴィット・マメット特集－　全国アメリカ演劇研究者会議編　一〇〇〇円
CARAVAN　2号　キャラヴァンの会編　一二〇〇円
橘（たちばな）〈ものと人間の文化史87〉　吉武　利文　二七〇〇円
ギリシア文学概説　J・ド・ロミイ／細井敦子・秋山学訳　四七〇〇円
メフメト二世－トルコの征服王－　A・クロー／岩永博・他訳　三八〇〇円
68年の思想　L・フェリー、A・ルノー／小野潮訳　三六〇〇円

シェイクスピアは誰だったか　R・F・ウェイレン／磯山・坂口・大島訳　二七〇〇円
第三の知恵　M・セール／及川馥訳　二七〇〇円
近代の正当性Ⅰ（全三巻）　H・ブルーメンベルク／斎藤義彦訳　三四〇〇円
遍歴のアラビア―ベドウィン揺籃の地を訪ねて―　A・ブラント／田隅恒生訳　三九〇〇円
戦争の機械　D・ピック／小澤正人訳　四七〇〇円

■放送大学教育振興会
メディアセンター論　渡辺信一・古賀節子　二六〇〇円
資料組織論　高鷲忠美・志保田努　二六〇〇円
図書館資料利用論Ⅰ　波多野宏之　二〇〇〇円
図書館資料利用論Ⅱ　増田信一・朝比奈大作・堀川照代　二四〇〇円

■明星大学出版部
鋼道路橋の建設・管理　伊藤満・栗田章光・鈴木博之・吉川紀　三五〇〇円
数学の基礎と演習　明星大学理工学部数学研究室編　一二〇〇円

■早稲田大学出版部
インターネットで変わる英語教育―早稲田大学文学部の実験―　早大文学部情報化検討委員会編　一〇〇〇円
デュルケムとウェーバーの現在　佐藤　慶幸　三五〇〇円
職業としての公務員〈行政の理論3〉　片岡　寛光　四二〇〇円
ベネルクス三国の行政文化―オランダ・ベルギー・ルクセンブルク―　下條美智彦　三二〇〇円
親鸞とルター―信仰の宗教学的考察―［新装版］　加藤　智見　三八〇〇円
ロシアのフォークロア［新装版］　F・セリバーノフ編著、金本源之助監訳　三四〇〇円
早稲田大学理工総研シリーズ　第10回配本／第10巻　東京の大深度地下［建築編］　尾島俊雄・高橋信之　二〇〇〇円
叢書　ワセダ・リブリ・ムンディ
㉖スペインの政治―議会君主制の「自治国家」―　川成洋・奥島孝康編　二九〇〇円
㉗スペインの経済―新しい欧州先進国の課題―　戸門一衛・原輝史編　二九〇〇円
㉘スペインの社会―変容する文化と伝統―　壽里順平・原輝史編　二九〇〇円
ワセダ・オープンカレッジ双書
①早稲田派エコノミスト列伝　原　輝史編　二五〇〇円
②生涯学習と高等教育　奥島孝康・原輝史編　二五〇〇円
シリーズ社会経済史　第8回配本／第8巻
イギリス都市の盛衰―一四〇〇～一六四〇年―　A・ダイヤー、酒田利夫訳　一八〇〇円
エリザベス朝喜劇10選（第Ⅱ期全10巻）第9回配本／第9巻　J・シャーリー、大井邦雄訳　二七〇〇円
早稲田大学蔵資料影印叢書洋学篇（全18巻）最終回配本／第16巻　遠西独度涅烏斯草木譜　Ⅴ　杉本つとむ編　三二〇〇〇円

■名古屋大学出版会
彼らの物語―日本近代文学とジェンダー―　飯田祐子著　三二〇〇円
ミジンコ―その生態と湖沼環境問題―　花里孝幸著　四三〇〇円

■京都大学学術出版会
ギリシア史1〈西洋古典叢書Ⅰ―10〉　クセノポン／根本英世訳　二八〇〇円
食卓の賢人たち2〈西洋古典叢書Ⅰ―11〉　アテナイオス／柳沼重剛訳　三八〇〇円

語る身体の民族誌―ブッシュマンの生活世界1―　菅原　和孝　三〇〇〇円
住空間史論Ⅰ　島村　昇　八〇〇〇円
重力波をとらえる―存在の証明から検出へ―　中村卓史・三尾典克・大橋正健編著　八〇〇〇円

■大阪経済法科大学出版部
ゼミナール　現代法入門〈増補版〉法学教育研究会編　一四〇〇円
現代社会と人権　村川行弘編　一六〇〇円
大阪経済法科大学　コンピュータの基礎　康祥隆監修　二〇〇〇円

■大阪大学出版会
ポンプの流体力学　C・E・ブレネン著／辻本良信訳　七二〇〇円

■関西大学出版部
伝わることば　ヤン・レンケマ著／中村則之訳　一六〇〇円
雨森芳洲の基礎的研究　泉　澄一　四〇〇〇円
エジプト　J・アスマン著／吹田浩訳　三五〇〇円
正当防衛について　中　義勝　五三〇〇円
三國志通俗演義史傳（下）　井上泰山編　一〇〇〇〇円
C・P・スノウの大河小説研究　田中　昭平　二九〇〇円
青本黒本集　神楽岡幼子解題　二四〇〇〇円
哲学の世界　渡辺　幸博　一二〇〇円
言語と自然　竹尾治一郎　三一〇〇円
逃避の病理　飯田　紀彦　二五〇〇円

■九州大学出版会
脳機能の解明―21世紀に向けて―　赤池紀扶・東英穂・藤原道弘・小暮久也編　七五〇〇円
内科学進歩のトピックス　仁保喜之・石橋大海編　八〇〇〇円
Molecular and Genetic Approaches to Diseases ―Immunology, Hematology and Oncology―　仁保喜之編　六〇〇〇円
沖縄の歴史と医療史　琉球大学医学部附属地域医療研究センター編　四五〇〇円
人間と文化　根井豊・新島龍美編　二〇〇〇円
物質の世界―ミクロからマクロへ―　中山正敏・淵田吉男編　二六〇〇円
世界と人間の再発見〈久留米大学公開講座12〉　笠　榮治編　二二〇〇円
Excel による経営データ処理　時永　祥三　一八〇〇円
ジャン・パウルの生涯　ギュンター・デ・ブロイン／恒吉法海訳　三六〇〇円
内生的経済成長論　Ⅱ　R・J・バーロ、X・サラ-イ-マーティン／大住圭介訳　五六〇〇円
ツァイス企業家精神　野藤　忠　五〇〇〇円

■東北大学出版会
心の科学史―西洋心理学の源流と実験心理学の誕生―　高橋　澪子　五〇〇〇円
三世紀肺癌診療の展望―第12回肺癌学会ワークショップ記録集―　貫和敏博・福岡正博・土屋了介監修　三〇〇〇円
ミルクの文化誌　足立　達　三〇〇〇円
髄液細胞診　中村　正三　四〇〇〇円

■流通経済大学出版会

■三重大学出版会

ISSN 0913-3305

大学出版部協会加盟出版部一覧

北海道大学図書刊行会	〒060-0809 札幌市北区北９条西８丁目　北大構内 TEL. 011-747-2308　FAX. 011-736-8605
聖学院大学出版会	〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1－1 TEL. 048-725-9801　FAX. 048-725-0324
慶應義塾大学出版会	〒108-8346 東京都港区三田２－19－30 TEL. 03-3451-6926　FAX. 03-3454-7029
産能大学出版部	〒152-0035 東京都目黒区自由が丘2-16-5 自由が丘昭和ビル TEL. 03-3724-9101　FAX. 03-5701-7499
専修大学出版局	〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-8-3 専修大学4号館 TEL. 03-3263-4230　FAX. 03-3263-4239
玉川大学出版部	〒194-8610 東京都町田市玉川学園6－1－1 TEL. 0427-39-8935　FAX. 0427-39-8940
中央大学出版部	〒192-0393 東京都八王子市東中野742－1 TEL. 0426-74-2351　FAX. 0426-74-2354
東海大学出版会	〒151-8730 東京都渋谷区富ヶ谷2－28－4 TEL. 03-5478-0891　FAX. 03-5478-0870
東京大学出版会	〒113-8654 東京都文京区本郷7－3－1 東京大学構内 TEL. 03-3811-8814　FAX. 03-3812-6958
東京電機大学出版局	〒101-8457 東京都千代田区神田錦町2－2 TEL. 03-5280-3433　FAX. 03-5280-3563
東京農業大学出版会	〒156-8502 東京都世田谷区桜丘1－1－1 TEL. 03-5477-2562　FAX. 03-5477-2643
法政大学出版局	〒162-0843 東京都新宿区市谷田町2－14－ 1 TEL. 03-5228-6271　FAX. 03-5228-6010
放送大学教育振興会	〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-14-1郵政互助会琴平ビル3F TEL. 03-3502-2750　FAX. 03-3592-2482
明星大学出版部	〒191-8506 東京都日野市程久保2－1－1 TEL. 042-591-9979　FAX. 042-593-0192
早稲田大学出版部	〒169-0071 東京都新宿区戸塚町1－103 TEL. 03-3203-1551　FAX. 03-3207-0406
名古屋大学出版会	〒464-0814 名古屋市千種区不老町１ 名古屋大学構内 TEL. 052-781-5027　FAX. 052-781-0697
京都大学学術出版会	〒606-8501 京都府京都市左京区吉田本町 京都大学構内 TEL. 075-761-6182　FAX. 075-761-6190
大阪経済法科大学出版部	〒581-0853 大阪府八尾市楽音寺6－10 TEL. 0729-41-8211　FAX. 0729-41-9979
大阪大学出版会	〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1-1 大阪大学事務局内 TEL. 06-877-1614　FAX. 06-877-1614
関西大学出版部	〒564-8680 大阪府吹田市山手町3－3－35 TEL. 06-368-1121　FAX. 06-389-5162
九州大学出版会	〒812-0053 福岡市東区箱崎7－1－146 九州大学構内 TEL. 092-641-0515　FAX. 092-641-0172
東北大学出版会(準会員)	〒980-8577 仙台市青葉区片平2－1－1 東北大学構内 TEL. 022-214-2777　FAX. 022-225-2029
流通経済大学出版会(準会員)	〒301-8555 茨城県龍ヶ崎市平畑120 TEL. 0297-64-0001　FAX. 0297-64-0011
三重大学出版会(準会員)	〒514-8507 三重県津市上浜町1515 三重大学出版ホール内 TEL. 059-232-1356　FAX. 059-231-1356

大学出版(第38号)'98夏　平成10年7月10日発行　発行所／大学出版部協会
〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号 東大構内 東京大学出版会内 電話03-3812-2111 (内)7956
E-MAIL: ajup@lian.com　URL: http://www.lian.com/AJUP/　**頒布価格100円　〒共**